大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

OMUPブックレット No.6　堺学から堺･南大阪地域学へ：地域学の方法と堺・南大阪地域学

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-08-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 乾, 善彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017021

OMUPブックレット No.6　「堺・南大阪地域学」シリーズ1

堺学から堺・南大阪地域学へ

ー地域学の方法と堺・南大阪地域学ー

乾　善彦

大阪公立大学共同出版会

OMUPブックレット No.6　　「堺・南大阪地域学」シリーズ1

堺学から堺・南大阪地域学へ

－地域学の方法と堺・南大阪地域学－

乾　善彦

Ⅰ．堺学から堺・南大阪地域学へ　1

Ⅰ－1．堺学のはじまり
Ⅰ－2．堺学の実際
Ⅰ－3．大学連携と堺・南大阪地域学
Ⅰ－4．現代GP「地域学による地域活性化と高度人材養成」と堺・南大阪地域学

Ⅱ．堺・南大阪地域学とは　17

Ⅱ－1．堺・南大阪地域学の対象地域
Ⅱ－2．堺・南大阪地域学のめざすもの
Ⅱ－3．地域学の方法
Ⅱ－4．地域相対化としての地域学

Ⅲ．堺・南大阪地域の歴史環境　26

Ⅲ－1．古代の南大阪地域
Ⅲ－2．熊野街道と高野街道
Ⅲ－3．中世堺の繁栄と異文化交流
Ⅲ－4．大和川の付け替え
Ⅲ－5．南大阪の文化遺産

Ⅳ．堺・南大阪地域学の展望　42

Ⅳ－1．布団太鼓の復活
Ⅳ－2．大学連携と地域貢献
Ⅳ－3．堺・南大阪地域学の展望

大阪公立大学共同出版会

Ⅰ．堺学から堺・南大阪地域学へ

われわれが提唱する堺・南大阪地域学とはどういうものか。これについて述べる前に、われわれはなぜ、堺・南大阪地域学を提唱するのか。その前身となる、大阪女子大学上方文化研究センターが取り組んできた堺学について述べておく。

Ⅰ－1．堺学のはじまり

われわれが堺・南大阪地域学を提唱する、そのきっかけは、大阪女子大学において、平成13（2001）年度から平成15（2003）年度までの3年間にわたって行われた堺学にある。これは堺市の援助で、（財）堺都市政策研究所と大阪女子大学上方文化研究センターとの共同研究として行われたものである。

堺都市政策研究所は、堺市、商工会議所、農協などの資金援助を得て作られた、公益法人の都市政策を研究する機関であり、都市計画や福祉などの社会政策、あるいは文化政策などの調査を行って、総合的なまちづくりを考えてきた。そのうちの、文化政策の一環として、堺学に取り組んできていた。

具体的には、平成6（1994）年から、「堺学」を提唱し、年4回の講演会を開催し、その記録を『フォーラム堺学』として刊行してきた。この講演会は主に生涯教育の一環としてあり、また、堺の文化発掘が中心でもあった。その内容は、『フォーラム堺学』の目次によって知られる（資料1）。

【資料１】フォーラム堺学目次（堺都市政策研究所ＨＰより）

第１集

第１回　都市文化としての堺学	武庫川女子大学教授 髙田　公理氏
第２回　生活文化としての堺刃物	（株）和泉利器製作所社長 信田　圭造氏
第３回　堺にオペラが育つまで	堺シティオペラ副会長 安則　雄馬氏
第４回　外から見た堺	堺市博物館長 角山　榮氏
第５回　上方文化と堺	文芸・演劇評論家 河内　厚朗氏
第６回　堺に見る文学	作家 難波　利三氏

第２集

第１回　仁徳天皇陵はいかにつくられたか？	（株）大林組広報室次長 林　章氏
第２回　お茶の来た道	（株）つぼ市製茶本舗代表取締役社長 谷本　陽蔵氏
第３回　博覧会と大浜	京都精華大学助教授 橋爪　紳也氏
第４回　中世の堺のまちなみ	大阪市立大学助教授 谷　直樹氏
第５回　演劇文化と堺 ～伝統芸能と近代～	『上方芸能』編集次長 森西　真弓氏

第３集

第１回　万葉と堺 ～磐姫皇后～	大阪大学名誉教授 犬養　孝氏
第２回　石津川と和ざらし・ゆかた	堺注染和晒興業会理事長 本郷　善之助氏
第３回　南宗寺 ～堺文化の源流～	南宗寺住職 田島　碩應氏
第４回　堺鉄砲ものがたり	歴史街道推進協議会事務局顧問 真木　嘉裕氏
第５回　実行の人・河口慧海	宮田　恵美氏

第４集

第１回	古代王権と百舌鳥古墳群	京都大学名誉教授 上田　正昭氏
第２回	筒井家と堺	筒井　貞氏
第３回	古典芸能と堺 ～堺の能舞台～	堺能楽会館館主 大澤　徳平氏
第４回	日本の香り ～堺の線香～	堺線香工業協同組合理事長 中田　雅一朗氏
第５回	中世・近世の文芸と堺	帝塚山学院短期大学学長 鶴崎　裕雄氏

第５集

第１回	堺の自然 ～自然のたたずまいを生かしたまちづくり～	大阪府立大学名誉教授 保田　淑郎氏
第２回	一堺漁人日本の喜劇王 ～曽我廼家五郎～	浄因寺住職 幻中　滉学氏
第３回	くらしとともに生きてきた建物 ～堺のおてら・やしろ・すまい～	奈良女子大学教授 上野　邦一氏
第４回	コンブロードと堺の昆布	(社)日本昆布協会副会長理事 松本　一男氏 堺昆布加工業協同組合理事長 郷田　忠良氏

第６集

第１回	フランシスコ・ザビエルと堺 ～経済史家から見た世界の中の堺～	堺市博物館長・和歌山大学名誉教授 角山　榮氏
第２回	小谷城と堺	和歌山大学名誉教授 南　清彦氏
第３回	堺の気象環境と百舌鳥古墳群 ～古墳の環境緩和機能～	大阪府立大学農学部教授 清田　信氏
第４回	西野に描いた大正の夢 ～倉橋仙太郎と「新文化村」～	大阪府立堺東高等学校教諭 井村　身恒氏

第７集

第１回	高林家住宅の維持管理と年中行事	高林家当主 高林　永統氏

第2回	堺手織緞通	関西大学経済学部教授 角山　幸洋氏
第3回	秀吉と堺・紀州街道 ～中世の堺と街道の役割～	作家・向陽台高等学校校長 中田　善明氏
第4回	堺と茶の湯	国立民族学博物館教授 熊倉　功夫氏

第8集

第1回	堺と自転車	自転車博物館サイクルセンター 事務局長 中村　博司氏
第2回	堺の醤油屋「河又・大醤」	河又株式会社・大醤株式会社 代表取締役社長 河盛　幹雄氏
第3回	湊潮湯について	湊潮湯 勝又　光子氏
第4回	名所大浜と潮湯について	大阪市立大学大学院助教授 橋爪　紳也氏
第5回	堺県の知事と住民 －地方分権と自治の視点から－	大阪大学名誉教授 山中　永之佑氏

第9集

第1回	堺の鉄砲鍛冶	堺鉄砲研究会 代表 澤田　平氏
第2回	内川・土居川水系を活かした環濠都市の再生	内川・土居川まつり実行委員会 委員長 平野　憲司氏
第3回	堺と大和川の付け替え工事	中甚兵衛十代目 中　九兵衛好幸氏
第4回	端午の節句と堺五月鯉幟	堺五月鯉幟工房「高儀」 高田　武史氏

第10集

第1回	阪田三吉と将棋の世界	日本将棋連盟理事　九段 小林　健二氏
第2回	戦前・戦後の堺のまちづくり	桃山学院大学　経済学部教授 芝村　篤樹氏

第３回	地域密着型企業チームの活動と社会体育への提言	ブレイザーズスポーツクラブ 常務取締役事業部長 小田　勝美氏
第４回	堺の臨海部のまちづくり	京都大学名誉教授 吉川　和広氏
第11集		
第１回	能楽「高砂」住吉明神 めでたい住吉大社と堺 －梅若猶義高砂を舞う－	大阪女子短期大学名誉教授 小川　晴子氏 観世流能楽師 梅若　猶義氏
第２回	湊焼の成立と作品について	和泉市久保惣記念美術館学芸員 船木　佳代子氏
第３回	堺のモニュメント－龍女神像復元－	株式会社白石彫刻研究所取締役・彫刻家 岡村　哲伸氏
第４回	400年の伝統漢方と片桐棲龍堂	片桐棲龍堂十七世 片桐　平智氏

一方、大阪女子大学においては、研究内容を積極的に府民に発信するてだてとして、講演形式の府民教養講座と授業を積極的に公開する授業公開講座との、二種類の公開講座をおこなってきた。堺市との連携としては、とくに生涯教育の面で教育委員会とのつながりが強かったが、堺都市政策研究所との共同では、平成８（1996）年に「生涯学習社会における大学と地域との連携」というシンポジウムを開催している。ちなみに、府立３大学における平成15（2003）年度の公開講座の実績は、資料２に示すとおりである。

堺都市政策研究所では、堺学が学であることについて、大学からの協力を求める空気が高まり、また、大学側からは、積極的にこれを授業に取り入れたいという要請があり、両者の思惑が一致した。そこで、当時の堺都市政策研究所長林義昭と大阪女子大学学生部長小股憲明との間で話し合いがもたれ、平成13（2001）年度から３年間の計画で、共同研究の形で堺学を考えるとともに、大阪女子大学において授業科

【資料２】平成１５年度公開講座等実施状況（「平成 16 年度公立大学実態調査表」から抜粋）

大学名	事業名称	主な講座の名称（テーマ）	講座数	参加者数
大阪府立大学	府民講座	「組織・経営活動におけるマネージメント」他９講座	10	997
	水曜講座（前期）	「電子顕微鏡で何がわかるか」他９講座	10	602
	水曜講座（後期）	「インターネットと暗号」他７講座	8	372
	体験参加型講座	植物の不思議に触れる	1	16
	体験参加型講座	パソコンでできる3次元ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｸﾞﾗﾌｨｯｸｽ講座	1	42
	体験参加型講座	光の糸でんわ　光通信を体験しよう	1	21
	青少年サマーセミナー	あれ！？船が大きくゆれだした！ ～同調のナゾを探る～	1	89
	農学生命科学研究科公開セミナー	私たちの生活とバイオ	1	151
	授業公開講座「関西経済論Ⅸ」	「関西活性化の方途」他10講座	11	7,335
	総合科学部第７回公開セミナー	「天才数学者・岡潔」～研究の中の生活～	1	125
	総合科学部第５回市民公開フォーラム	「人間と社会・環境～総合的視点を求めて」（昔話と説話他５講座）	6	283
	第23回大阪府立大学社会福祉学部セミナー	地域福祉計画と地域生活支援	1	144
	先端科学研究所第11回公開講演会	木曜の夜はちょっとサイエンス「自然に学ぶ」	1	72
	第10回先端科学研究所シンポジウム	生物分子科学の新しい潮流を探る	1	79
	第33回生物資源開発センターセミナー	１４年度協働研究成果報告・特別講演	1	148
	第34回生物資源開発センターセミナー	植物バイオテクノロジーは持続的農業生産に貢献できるのか ～その分子生理学的展開～	1	37
大阪女子大学	授業公開講座	日本語文学史　他５７テーマ	58	5,746
	府民教養講座	近松の文学とことば　他６テーマ	7	2,487
	女性学連続講演会	ケアの現在－制度と現実のはざま－	1	560
	女性学連続セミナー	ケアという労働、制度、グローバル化	1	96
	男女共同参画政策のための研修事業	グローバリゼーションと社会政策	1	50
看護大学 大阪府立	看護大学公開講座	快適な人生（ＱＯＬ）をめざして	9	429
	羽曳野医療フォーラム	糖尿病の治療について	1	148

目として堺学を開講することになった。

Ⅰ－2．堺学の実際

大阪女子大学における3か年の堺学は以下のようなものである。上方文化研究センターが運営の主体となり、すべてのプログラムを、堺都市政策研究所と共同で企画した。

授業科目には堺学Ⅰと堺学Ⅱの2種類が用意された。堺学Ⅰは毎回異なるテーマで全13回の講座と2回のフィールドワークとからなる。全学年を対象として共通教育科目に位置付けられ、同時に府民教養講座として府民に開放された（初年度は、共通教育科目としては準備が間に合わず、上方文化研究センター主催の府民教養講座としてのみ開講)。堺学Ⅱは、2回生以上を対象とする、人文社会学部人文学科の専門科目として開講され、平成13（2001）年度と平成15（2003）年度は、人文学科日本語日本文学専攻の専門科目「地域と文学」として、平成14（2002）年度は人文学科国際文化専攻の専門科目「地域文化史論」として開講された。さらに、これは授業公開講座として府下の女性に開放された。堺学Ⅰ同様に、府民教養講座として府民全体に公開することが検討されたが、専門科目ということもあり、授業公開の方法がとられ、したがって、女子大学の正規の授業の公開という点で、堺学Ⅰとはことなり、専門科目に男性の交じることは、問題が多いとされ、女性だけに開放されたのである。ここに、女子大学単独で堺学を運営する難点があった。

講義の内容と受講者数は資料3に示すとおりである。

3年間の講義内容の詳細については、『フォーラム堺学』8～10号、『上方文化研究センター研究年報』3～5号に報告が掲載されている。

最終年度、平成15（2003）年度の堺学Ⅰの最終回に、3年間の総括がおこなわれている。これは、大阪女子大学での堺学を企画した、林・小股両氏に、実務の中心であった上方文化研究センターの乾が、その発端、評価、今後の展望を尋ねる形で進められているが、そこで、評価と展望について、次のように述べられている（『上方文化研究セン

【資料3】堺学の概要

堺学Ⅰ（別表）
　平成13年度は上方文化研究センターの府民教養講座として開講
　平成14年度から共通教育科目として開講　府民教養講座とする
堺学Ⅱ　人文社会学部人文学科の専門科目として開講　授業公開とする
　平成13年度　帝塚山学院大学　鶴崎裕雄　泉州の歴史と文芸（地域と文学）
　平成14年度　仏教大学（非）　斉藤利彦　近世都市堺と芸能（地域文化史論）
　平成15年度　帝塚山学院大学　山田俊幸　堺と近代文学（地域と文学）

受講者数	堺学Ⅰ		堺学Ⅱ	
	学生	講座	学生	講座
平成13年度	－	145	29	35
平成14年度	121	139	44	29
平成15年度	149	151	19	41

報告書
　都市政策研究所　フォーラム堺学　8～10号
　上方文化研究センター研究年報　3～5号

（別表）　堺学Ⅰの内容
平成13年度

回	開催日	テーマ	講師
1	10月16日	堺市の総合計画について	堺市企画部長　水口　宗夫
2	10月23日	堺と自転車	自転車博物館サイクルセンター事務局長　中村　博司
3	10月30日	「さかい・まち・こんなまち研究会」の取り組みについて	大阪府立大学大学院教授　増田　昇
4	11月6日	さかいの里山のはなし	大阪府立大学農学部教授　石井　実
5	11月13日	堺の醤油屋「河又・大醤」	河又(株)社長　河盛　幹雄
6	11月20日	堺市の教育について	大阪女子大学教授　小股　憲明
7	11月27日	堺県から堺市へ：成立過程と役割	大阪大学名誉教授　山中永之佑
8	12月4日	与謝野晶子　人と文学	天理大学文学部教授　太田　登
9	12月11日	名所大浜と潮湯	大阪市立大学大学院助教授　橋爪　紳也 浜潮湯　勝又　光子

10	12月18日	都市空間としての堺	大阪府立大学総合科学部教授　藤井　正
11	1月15日	ハーベストの丘と集客	堺農業公園(株)専務取締役　富岡　光夫
12	1月22日	堺の仏教美術	大谷女子大学文学部教授　吉原　忠雄
13	1月29日	中世・堺の富と文化のゆくえ　これからのまちづくりに向けて	堺市博物館館長　角山　榮

平成14年度

回	開催日	テーマ	講　師
1	10月15日	自由・自治都市　堺	京都橘女子大学客員教授　朝尾　直弘
2	10月22日	堺の鉄砲鍛冶	堺鉄砲研究会代表　澤田　平
3	10月29日	堺・古代的世界の形成　～街道と水運をめぐって～	京都大学名誉教授　上田　正昭
4	11月5日	利休が生んだ和菓子の文化	香川県明善短期大学名誉教授　秋山　照子
5	11月12日	内川・土居川水系等を生かした環濠都市の再生	内川・土居川まつり実行委員会委員長　平野　憲司
6	11月19日	堺と大和川の付け替え工事	中甚兵衛十代目　中　好幸
7	11月26日	近世の堺商人	大阪女子大学教授　山中　浩之
8	12月3日	近代板本の魁～堺板節用集とその周辺	大阪女子大学教授　乾　善彦
9	12月10日	堺と古今和歌集	大阪女子大学講師　西田　正宏
10	12月17日	端午の節句と堺の伝統工芸～堺五月鯉幟～	伝統工芸士　髙田　武史
11	1月14日	泉北ニュータウンの将来像	京都大学名誉教授　三村　浩史
12	1月21日	場所の顕在化による都市再編	大阪府立大学大学院教授　増田　昇
13	1月28日	堺のまちづくり	堺市市長公室理事　指吸　明彦

平成 15 年度

回	開催日	テーマ	講　　師
1	10 月 14 日	行基と堺	大阪教育大学 教育学部教授　吉田　靖雄
2	10 月 21 日	中世の堺商人	大阪樟蔭女子大学 学芸学部教授　小西　瑞恵
3	10 月 28 日	阪田三吉と将棋の世界	(社)日本将棋連盟 理事　九段　小林　健二
4	11 月 4 日	堺の祭りと信仰	堺市博物館 学芸課学芸第一係長　吉田　豊
5	11 月 11 日	堺の美術（近世堺商人とのかかわり）	堺市教育委員会 社会教育課主査　井渓　明
6	11 月 18 日	堺と俳諧	大阪経済大学 人間科学部教授　永野　仁
7	11 月 25 日	戦前戦後の堺のまちづくり	桃山学院大学 経済学部教授　芝村　篤樹
8	12 月 2 日	堺の鉄道史	追手門学院大学 経済学部教授　宇田　正
9	12 月 9 日	堺の未来の交通（ＬＲＴ）	(株)モチベート　代表取締役（ＬＲＴ、トロリーバス研究家）　森　五宏 堺市都市計画部 鉄軌道対策担当課長　京谷　巌
10	12 月 16 日	地域密着型企業チームの活動と社会体育への提言	(株)ブレイザーズスポーツクラブ常務取締役事業部長　小田　勝美
11	1 月 13 日	堺市民の木「ヤナギ」と堺の自然環境	大阪女子大学理学部 講師　石原　道博
12	1 月 20 日	堺の臨海部のまちづくり	京都大学名誉教授　吉川　和広
13	1 月 27 日	堺学Ｉのまとめ	大阪女子大学副学長　小股　憲明 (財)堺都市政策研究所　前事務局長　林　義昭

ター研究年報』第5号)。

〈評価について〉

(市側) 学生さんたちには、まず、自分の通っている大学のあるまち堺という所をよく知ってもらい、まちのよい点や悪い点を発見してもらいながら、堺との関係を築いていってもらいたいということです。(中略) 講座の中に実際にまちを歩いてもらって、実感してもらえたのは効果があったと思います。この中から堺のまちづくりに携わってもらえる方が、一人でもあらわれたら、なお効果があったといえるでしょう。堺都市政策研究所では、府大と女子大の学生さんの自主的な活動としてまちづくり研究会があり、その成果が市の関係機関との意見交換から、実際の施策に反映したものもあります。

(大学側) 多様な講義の内容も大きな効果の一つですが、それを生み出して運営してきた、大学と行政との連携というものに注目しておきたいと思います。普段あまり付き合いのない行政の方たちと大学の研究者とが一緒になって、議論しあって一つのものを作り上げていく、その試みは、今後、さまざまな形で発展していくのだろうと思います。

〈展望について〉

(市側) これから堺学の進む方向としては、私見ですが、単なるものしりの学でなく、学問の一分野として確立することが必要です。ただ、それが大学の中で完結するのではなく、つまり、研究のための研究にとどまらず、地域のまちづくりに活かされなければなりません。研究者の支援を得ながら、地域の人々も参画して、調査し研究し、知恵を出し合って、まちづくり、生活づくりに活かしていけるようなものであってほしいと思います。大学はそのための場を市民に提供してほしいし、そこからまちづくりが始まる、みんなが乗っていく起点となるようなプラットホームになってほしい、そんなことを願っています。

(大学側) さいわいかどうか、平成十七年度に府立三大学が統合して新しい府立大学が生れます。そこで堺学が継続されればなあと思いま

す。それは、府立大学だけでなく、堺や南大阪に立地する大学が協力して行えるようなものでありたい。そのためにも南大阪地域大学コンソーシアムのような活動は、非常に重要だと思うのです。（中略）大学は、学問的な貢献をして地域にそれを活かしていき、市側は財政的な支援によって、大学を支えていき、それが地域の発展に活かされる、これが今後の地域と大学との新しい関係のありかたのように思います。その点で、本学で行ってきた経験が大いに活かされるのだろうと思います。

諸般の事情で、3年間の共同研究は、一応、3年間で終結した。大学側からの事情としては、3大学統合が具体化して、担当していた教員の負担が桁外れに増大したことが最も大きな理由である。また、堺市あるいは堺都市政策研究所のほうでも事業の見直しがあった。しかしながら、堺学の共同研究は、南大阪地域大学コンソーシアムの活動を通じて継続していくことになった。平成16（2004）年度、平成17（2005）年度のコンソーシアム主催の南大阪地域講座の中に、上方文化研究センターと堺都市政策研究所とが共同で、堺学4講座を提供している。

Ⅰ－3．大学連携と堺・南大阪地域学

大阪女子大学の堺学には、もうひとつの伏線がある。平成10（1998）年から、堺市に立地する6大学、大阪女子大学にくわえ、大阪府立大学、堺女子短期大学、帝塚山学院大学、プール学院女子短期大学、桃山学院大学によって共同でシンポジウムがもたれ、これをきっかけに、それまで堺市と女子大学とがおこなってきた市民教養講座をひろげ、堺泉北市民大学という講座が発足したことである。これによって、南大阪地域の連携ということが模索され、そこから誕生したのが、南大阪地域大学コンソーシアムである。これは堺市の援助のもと、南大阪地域の27大学・短大のうち、20大学・短大が参加して、平成14（2002）年に特定非営利活動法人（NPO法人）として出発した。平成18（2006）年現在、参加大学は、

〔会員大学〕

大阪芸術大学、大谷女子大学、大谷女子大学短期大学部、帝塚山学院大学、大阪女子短期大学、大阪府立大学、羽衣国際大学、羽衣学園短期大学、プール学院大学、プール学院短期大学部、桃山学院大学、和歌山大学

〔個人会員参加大学〕

大阪健康福祉短期大学、大阪千代田短期大学、近畿大学医学部、大阪明浄大学、関西福祉科学大学、太成学院大学、阪南大学

となっている。コンソーシアムの活動については、別のシリーズで小股憲明が詳述する予定であるが、コンソーシアムのパンフレットによると以下のような事業が展開されている。

①大学連携教育プログラム

エクステンションプログラム、単位互換システム、教職員研修事業、高大連携教育事業

②大学･企業共同プログラム

「研究者ＤＢ」の活用・更新および産学共同研究促進事業、「学生クラブ・アクト」事業、関空研究会

③インターンシッププログラム

インターンシッププログラム

④南大阪地域講座

「南大阪地域講座」の開催、ベンチャースクールの開催、情報提供事業（大学公開講座、友の会など）

⑤情報交流・発信

情報交流・発信ＨＰの管理・運営、ニュースレターの発行、南大阪歩き方

⑥その他、本会の目的を達成するために必要な事業

堺学を大阪女子大学単独でおこなうことは、非常に困難の伴うものであった。ひとつは、女子大学であることで、授業公開などでは男性の参加に難点があった。また、小規模の大学で企画するには、地域学

全体に対する目配りに限界がある。その点、3年間の共同研究の途中で、コンソーシアムが発足したことは、堺学の今後の展開を考えるのに、大きな指針であった。3年間で一応の区切りをつけたのは、ひとつには、コンソーシアムにおいてさらなる広がりをめざしたからでもあった。先に述べたように、平成16（2004）年度、平成17（2005）年度は、コンソーシアム主催の南大阪地域講座の中で、堺学4講座を共同で提供することで、堺学は継続している。そのさなかに府立3大学の統合があるが、小規模の女子大学から、高度研究型の総合大学への移行は、堺学を堺・南大阪地域学へと広げる契機となったのである。

Ⅰ－4．現代GP「地域学による地域活性化と高度人材養成」と堺・南大阪地域学

おりしも、大阪府立の3大学は、平成17（2005）年に統合され、あらたな大阪府立大学が高度研究型の総合大学として出発した。そこでは、旧府立大学の総合科学部文系と社会福祉学部、女子大学の人文社会学部とが集まって文系の新学部、人間社会学部が発足して、上方文化研究センターの遺産は、この新学部に引き継がれようとしていた。新大学では、さらに文部科学省のさまざまな補助金申請に積極的に取り組むことがうたわれていた。新学部は3つの部局がいっしょになったものであり、学部独自の方向はまだ、見出せない時期に、ひとつの方向を先に見た今までの蓄積を活かす方向に見出した。上方文化研究センターが中心となって、堺・南大阪地域学を提唱することは、総合大学でしかできないものである。そこで、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に「地域学による地域活性化と高度人材養成―大学コンソーシアムを活用した地域連携による「堺・南大阪地域学」の確立とその成果に基づく地域貢献のための高度な人材養成プログラム―」と題した取組を申請し、平成17（2005）年度の採択となった。現代GPは教育のための取り組みに対する補助金であるが、本学では、堺・南大阪地域学の確立をめざし、これを学生教育に最大限活かす方法を画策している。申請書には、取組の概略として次のよ

うに記載されている。堺市がめざしていた、まさに人材養成のための取り組みなのである。

本取組は、新しい形態の地域学「堺・南大阪地域学」を提唱し、地域学と専門教育との融合によって、本学が立地する堺市を中心とした広域南大阪地域（堺・泉州・南河内）の実情を踏まえて専門的知識をもって地域活性化を行う高度な人材の養成を図るものである。まず、特定非営利活動法人（ＮＰＯ）南大阪地域大学コンソーシアムの活動を利用し、南大阪地域の各自治体、（財）堺都市政策研究所等と連携して、産官学民一体の研究組織「「堺・南大阪地域学」フォーラム」を立ち上げる。そして、その成果を教育に反映させるために、「堺・南大阪地域学」の科目を開設し、これを中心として、各学部の専門教育科目と地域学とを融合させた副専攻を設ける。また、コンソーシアムや自治体と連携して、フィールドワークやインターンシップを取り入れ、学外での実践活動を通してより幅の広い視野を持ったアクティブな人材を育成する。

ここでは南大阪地域大学コンソーシアムと堺都市政策研究所との協力を中心に、南大阪地域全体の取り組みとして堺・南大阪地域学を考えることがうたわれている。ここでの堺・南大阪地域学は、

「堺・南大阪地域学」は、堺を中心とした南大阪地域を多角的に研究し、その成果を街づくりに活かすことを目的とする。これは、歴史文化や風土の記述に偏りがちな従来の地域学から脱却し、

①文化遺産としての文学歴史の再発見

②政令指定都市としての堺市、個性ある南大阪地域各自治体の現状と課題の再認識

③文化遺産や自然を活かした新しい世代のよりよい街づくりへの提言

という地域の過去・現代・未来を見据えた三つの柱からなる、新しい形態の実践的な地域研究である。

とされている。ここに、堺学を発展的に堺・南大阪地域学へと展開する環境が整ったといえよう。では、われわれがめざす堺・南大阪地域

学とはどういうものか、それが学として成立するためには、どのような方法が求められるか、以下に論述し、堺・南大阪地域学への提言とする。

《課題》

南大阪地域に限らずさまざまな自治体における公開講座の実態と、その講座における大学との連携について調べ、地域的な差異があるかどうか、比べてみよう。

【補注】

南大阪地域大学コンソーシアムについては、本シリーズの小股憲明『南大阪地域大学コンソーシアムの挑戦－産学官民地域連携の新たな展開－』に詳述されている。合わせて参照されたい。

堺学から堺・南大阪地域学へということに関して、大阪府立大学では、現代ＧＰの事業として、さまざまな催しが開催されており、2008年３月現在、以下の報告書がでている。

公開シンポジウム報告書『堺学から堺・南大阪地域学へ』2005年12月18日開催

堺・南大阪地域学フォーラム準備大会報告書　2006年３月28、29日開催

堺・南大阪地域学フォーラム設立大会報告書　2006年10月7、8日開催

第２回堺・南大阪地域学フォーラム報告書　2007年10月5、6日開催

さらに、大阪府立大学に設置された教養科目「堺・南大阪地域学Ｉ」の詳細については、上方文化研究センター年報第８号（2007.3)、同第９号（2008.3）に、講義の要旨が掲載されており、また、堺都市政策研究所編『堺学フォーラム』は、現在も毎年刊行されており、堺・南大阪地域学の成果を含む。

Ⅱ．堺・南大阪地域学とは

堺・南大阪地域学とは、堺・南大阪地域を対象とする地域学である。それが学であるかぎり、対象と方法が明らかにされなければならない。地域学とは、そもそもその地域に対する総合的な研究であるが、だからといって、単なる個別研究の集合では、学としての意味をなさない。学であるかぎり、対象と方法とが明確な、一つの統一体でなければならないだろう。われわれがめざす堺・南大阪地域学が、学としての統一性をもつために、どのような方法が必要か、まず考えてみたい。

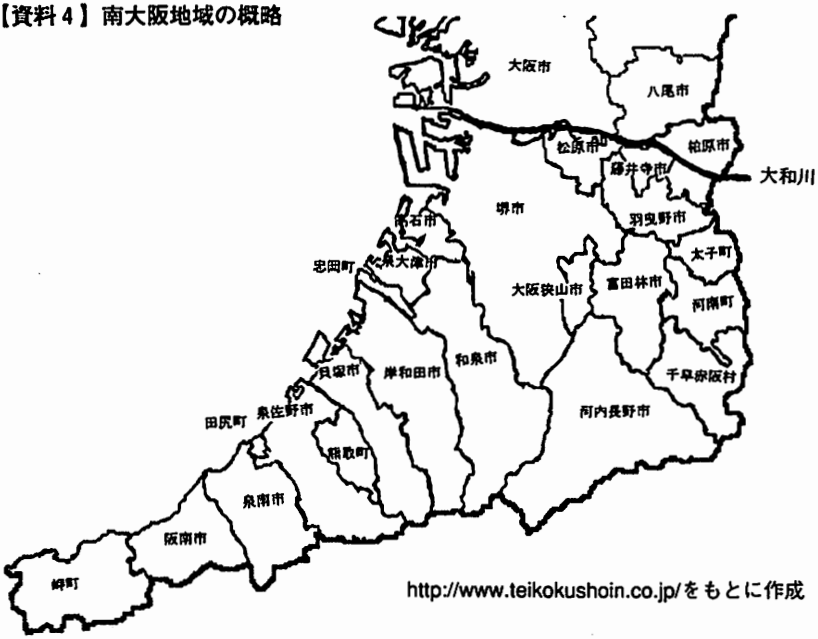
Ⅱ－1．堺・南大阪地域学の対象地域

本学が対象とする堺・南大阪地域の範囲は、大和川以南及びその流域を含む。現在の行政区域で言うと、堺市、高石市、泉大津市、忠岡町、和泉市、岸和田市、貝塚市、泉佐野市、熊取町、田尻町、泉南市、阪南市、岬町、松原市、藤井寺市、羽曳野市、柏原市、富田林市、大阪狭山市、太子町、河南町、千早赤阪村、河内長野市の16市、６町、１村となる。旧国名でいうと、摂津国の一部・河内国の南半分、和泉国全部ということになる。

堺とはまさに、摂津国と和泉国の国境であり、旧堺市街の東側、三国が丘という地名は、両国とさらに河内国の三国の国境に由来するものである。現在、南海高野線堺東駅の西から南海本線堺駅へ延びる大小路が摂津と和泉の国境である。堺の北組は摂津国住吉郡に属し、南組は和泉国大鳥郡に属することになる。そして、その東郊三国丘より東が河内国である。現在、堺市と大阪市との境界線となる大和川は、江戸時代宝永元（1707）年に付け替えられたもので、それ以前、大和川は現在の石川、大和川の合流点から北に向かっていた。新大和川の両岸には、遠里小野や苅田など両市に同じ地名が残っているが、これは、大和川の付け替えで、ひとつの地域が分断された名残である。したがって、大阪市南部、住之江区、住吉区、東住吉区の一部と、八尾

市の南部も、歴史・文化的に深いつながりがあり、本学の対象とする。また、柏原市は中心部は大和川右岸であるが、上流地域では左岸を含み、また、行政的にも、たとえば大和川左岸の羽曳野市、藤井寺市とともに柏羽藤消防組合を構成しているなど、やはり文化的行政的に強いつながりがあるので、本学の対象となる（資料４）。

【資料４】南大阪地域の概略



地域的には、以上の地域が対象となるが、その地域の何を対象とするかも、吟味しておかなければならない。一応、当該地域に関することなら、なんでも対象となりうるのであるが、われわれが、何をめざすのか、それによって、対象は限定される。のちに展開するように、堺・南大阪地域学がめざすものは多岐にわたるので、対象もおのずと広がりをもつけれども、さすれば、われわれが堺・南大阪地域学で何をめざすか、それをここで明らかにしておくことが、対象を規定することになる。

Ⅱ－2．堺・南大阪地域学のめざすもの

前章に示したように、堺・南大阪地域学は、次の大きく3つの課題からなる。

①文化遺産としての文学歴史の再発見

②政令指定都市としての堺市、個性ある南大阪地域各自治体の現状と課題の再認識

③文化遺産や自然を活かした新しい世代のよりよい街づくりへの提言

人が生きる空間には、かならず過去・現在・未来がある。地域の研究とは、まさに人と空間の過去・現在・未来へのまなざしをもつことである。①文化遺産としての文学歴史の再発見は、過去を対象とする。次章でさまざまなテーマを掲げるが、主として歴史・文化が対象となろう。方法的には、人文科学的な方法が要求される。②地域の現状と課題の再認識は、さまざまな対象が予想される。地域政策、地域経済、地域教育、地域医療などなど、それぞれに社会的な問題を抱えているし、それを調査して問題点を明らかにすることは、③のよりよい街づくりのためには必要である。それらを対象とする社会調査は必須である。主として社会科学的な方法が要求される。③文化遺産や自然を活かした新しい世代のよりよい街づくりへの提言とは、①②について得られた成果を、最大限活かした生活空間の設計である。①②についてとられた、人文・社会学的な観点だけでなく、都市計画、都市設計のためのノウハウが要求されるし、それを実現するための技術的な裏づけも必要になる。工学部や生命環境学部等での研究成果が重要な位置をしめる。

これを逆から見れば、堺・南大阪地域学の研究対象は、それぞれの専門分野において、さまざまのかたちで設定しうるということである。地域にさえかかわれば、どのようにでも対象とすることができるといって、過言ではない。さらに、地域とのかかわりでいうならば、どのようなかたちでのかかわりでもよいということになる。とすると、地域学が対象とするのは、地域のみであるということになるが、はたし

てこれで学というものが成立するのであろうか？

ひとつには、それでもかまわないという意見もありうる。また、たしかに、最初はそこから出発するしかないことも事実である。しかしながら、重要なのは、目的と方法である。何のための地域学か、地域学に何を期待するのか、ということが学として問われなければならない。地域の総合的研究とは、そもそも何なのか、はっきりした目的がなければ、さまざまの研究は、単なる寄せ集めにしかならない。

地域学に何を期待するか、それは立場によって異なる。人文系の研究者は、地域の史的財産の有効性を問うであろうし、行政は、今の課題を解決する道を探る。また、住民はよりよい街づくりを指向するであろう。申請書に書かれている「産官学民の一体化」を指向するならば、そこへの期待は多岐にわたることが予想されるのである。それらのすべてに答える、学的方法は、一つの方向としては定めがたい面があるのは事実である。しかしながら、逆に、学という面からその方法をみつめる視点が考えうる。今、対象の多様性を一時保留して、今までの地域学の方法について考えてみよう。

Ⅱ－3．地域学の方法

地域学の方法は、いまだ暗中模索というのが現状である。見てきたように、何を問題とするか、何を期待するかによって、方法はおのずと異なってくる。われわれが、今、あらたな地域学として堺・南大阪地域学を提唱するのは、その方法論を問題とするからである。

「地域学」は近年、地方の時代が叫ばれるなかで、各地の特色を明らめることで広く用いられるようになってきた。大谷晃一『大阪学』の大ヒットで、広く一般に注目されるようになったものである。有名なベネディクト『菊と刀』に代表されるような「象徴」的地域文化論とでもいえようか。その地域はどのような特徴を持つか、その住民はどのような気質か、などと、「象徴」として地域が語られる。読者にとってはまことにわかりやすいかわりに、それがすべてでないことも明らかである。いわゆる「おらがくにさのくにじまん」的な地域研究は、

まちおこしに利用されることはあっても、それが学として成り立つものでは決してない。

地域学が普遍性をもつためには、一つの方法が規定される必要がある。その点では、古くからおこなわれてきた地誌の作成はこれに近いものがある。地域の総合的な記述という面では、地誌的な記述は、地域によらない普遍性がある。たとえば、わが国の地誌の魁となった奈良時代の風土記の撰述には、中央から記すべき内容が規定されており、各国風土記はこれに基づいて撰上されている。また、近世流行した名所図会もその編纂の方法は、一定しており、その集成は普遍化された地域学の一つのモデルともいえよう。ただし、地誌は地域の記述であるから、ある意味、記述される内容には偏りがあり、「総合的な記述」とは必ずしもいえない部分がある。なによりも、人文・社会科学的な記述にとどまり、未来を語ることはない。

しかしながら、元来、「地域学」なり「地方学」とは、本来、その地域の総合研究であったはずである。その地域の多面的な記述が求められる。それは一面その地域の特徴を明らかにするであろうし、場合によっては、他地域との類似性が指摘されることもある。また、総合的な研究であるから、地域の歴史文化だけでなく、現代的な産業や住民、あるいは都市計画といった場合によっては未来に関することも、記述の対象となろう。その点で、従来の記述的な地域学のありかたと、われわれが指向する地域学との間には、異なる面があるし、方法としての普遍性を求める視点は、あるいは、地域研究とは相容れない面があるのかもしれない。たしかに、地域的な差異や特徴を問題にしなければ、地域としての存在意味がなくなるということはある。その点で、『大阪学』は、ある意味、地域学のひとつのあり方を示したものであり、各地における地域学の発展に寄与したともいえよう。記述的地誌学的な地域学は、そのようにして展開してきた。

一方で、昭和37（1962）年に発足した日本地域学会は、「地域に関する総合的で学際的な学術研究の進展をはかり，会員相互間および関連諸機関との交流の場を提供し，地域科学（Regional Science）の進歩発

展に貢献することを目的とする。」（目的）とあるように、「総合的で学際的な学術研究」がうたわれており、国際的な地域学の組織であるPRSCO国際地域学会の主要メンバーとして、とくに国際的な活動をおこなっている。機関紙『地域学研究（Studies in Regional Science）』には、多様な研究が掲載されているが、たとえば、2001年の第31巻１号の内容は、次のようなものである（日本地域学会ＨＰから引用）。

熊田禎宣、富山憲典「高年齢者の活力ある社会参画を実現するための基盤的方策」

信国眞載、徳永澄憲、上山仁恵「小子・高齢化の地域経済へのインパクト－名古屋市計量モデルによる経済分析－」

Md. Fakrul ISlLAM and Yoshiro HIGANO「Environmental Problems and Water Resource Management in Floodplains: Evidence from the Teesta River Basin, Bangladesh」

栫井昌邦、齋藤三郎「来街地ベース不完全データへの入口来街頻度と回遊パタン同時逆推定法の拡張と評価」

齋藤三郎、山城興介「回遊行動からみた都心100円バスの経済効果の推計－福岡都心部におけるケーススタディ－」

関東哲生「戦略的貿易政策と政府の信頼性」

Jan Owen JANSSON and Rickard E. WALL「A Spatial Model of Plant Dispersion for Location and Competition Analyses」

河野正道「マーシャル的外部性と南北不均等発展」

Choon Sei LEE「Price Discrimination and Spatial Market Structures」

足達健夫、加賀屋誠一「「ふるさと銀河線」活用による都市間鉄道輸送の改善」

野澤勇樹、樋口洋一郎「東京圏における超通勤時間の導出と変化に関する基礎的研究」

山口誠、渋澤博幸「東三河地域の計量経済学的分析－豊川流域の水需給構造に注目して－」

田中正秀、明野斉史、田中啓一「リバース・モーゲージシステムを活用した都市居住環境の改善－密集市街地・月島（東京都中央区）

をモデルケースとしての政策提言－」

Yuzuru MIYATA and Xiaojin PANG「Economic and Material Accounting Matrix and its Application to Computable General Equilibrium Analysis of Plastics Recycling」

Yuzuru MIYATA and Aijun LI「A System for Integrated Environmental and Economic Accounting with Ecological Interaction」

内田賢悦、加賀屋誠一、佐藤馨一「大規模再開発事業における交通規制計画案の評価に関する研究」

黄國光、三木敏夫「アジア通貨・金融危機後における諸国の金融と経済構造改革に向けた動向」

寿崎かすみ、熊田禎宣「子育てに適した地域システム実現のための計画策定への参加手法に関する基礎的研究」

岡田修身「機械分野における福井県外資本企業の現状と問題点」

Yoji KUNIMITSU「An Analysis of Regional Inequalities in Per Capita Production and Causative Factors: Current Status of Agriculture, Manufacturing and Retail Trades in Vietnam」

渋澤博幸、氷鉋揚四郎「英米国における都市再開発政策に関する研究」

齋藤三郎、石橋健一、熊田禎宣「機会費用による中心商業地河川の価値の計測の試み－北九州都市紫川への消費者回遊行動アプローチの応用－」

一見して、社会科学的方法や工学分野での研究が中心であり、この傾向は、発足以来、大きく変わることはない。地域の今と未来を指向する点で、先に見た人文学的記述的な地域学とは、一線を画するものである。

つまり、現在の地域学は、歴史文化系の人文科学的手法の地域研究と、社会科学的、あるいは工学的な都市論との大きく二つの流れがあり、どうもそれは、お互いに無関係に流れているようなのである。

現在、日本各地で範囲の大小を問わず、HPで検索されるだけでも百

数十の地域学がおこなわれている。現代GPに採択された地域貢献の取り組みでも、多くは地域学を標榜するものである。地域学は、その点、歴史文化的な視点と街づくりが融合する、まさに総合的な地域学であるといえよう。堺学にしても、他地域でおこなわれている地域学と同様、総合的な側面を持ちつづけてきた。まさに、両者の複合として、現実的には、各地でそれがおこなわれているのである。ただし、それは、文化遺産をまちおこしに利用するか、そうでなければ、新しい現代的な街づくりを指向するか、そのいずれかによって、関心の中心線がずれるのが常である。したがって、歴史文化に中心が置かれたり、あるいはそれを無視して、開発に中心が置かれたり、やはり、人文科学的手法と社会科学的、工学的手法とが、合流しがたい部分があった。それが、一地域での取り組みであるかぎりにおいては、一地域のためには有効に働くとしても、それによって、地域学の方法が普遍化されるものではないのである。やはり、二つの方向が一つのベクトルを指向することで、普遍化する方法が考えられなければならないということになる。

Ⅱ－4．地域相対化としての地域学

堺・南大阪地域学が提唱するのは、高度人材養成に寄与する地域学の方法である。そこには、大きく二つの柱がある。

一つは、専門的な学問は必ずしも地域研究には関わりはないけれども、地域に寄与する面は必ずあるということである。社会に還元できない学問はない。さすれば、われわれの方法は、直接でなくとも地域に還元しうるものである。それぞれが専門の知識でもって地域貢献することは、地域に存する大学の使命である。個別には地域に関係がなくとも、その専門性を地域に活かすことができるなら、その専門を持った人材の養成は、地域貢献になるという、すでに従来から行われている、ごく当然のことを再認識することで、地域に資する研究となる。つまり、各自の専門から地域を見る視点を提供することである。今までの反省から言うならば、今までは、地域と直接関係ないからといっ

て、地域への視点を欠いていたことである。「すべての専門性を地域という面から見つめる」こと、これが方法の第一である。

もう一つは、地域の固有性を相対化する視点である。固有の特性を固有のものとして見るのではなく、共通性と差異との相関として相対化する。そのための視点は、異文化接触と異文化理解という方法である。たしかに、地域学の出発は地域の固有の特性を見出すことによって、地域の活性につなげるというものであったと思われる。地域の特産や地域気質の再発見がその主なものであった。ベネディクト『菊と刀』は日本の特質研究ではあるけれど、それは異文化理解のためのものであった。そもそも海外における日本学は、まさに異文化理解に端を発する。とするならば、地域研究というのは、そもそもが、異文化理解という面にあるのではないか？われわれが、自分たちの地域を研究する大きな目的の一つは、われわれ自身のアイデンティティにかかわるものなのである。個別の地域を他地域との異文化の接触という面から相対化することによって、そこから地域の特性を活かした街づくりを考える視点が生まれるものと思量する。「地域の特性を異文化理解の観点からとらえなおす」こと、これが方法の第二である。

異文化理解といえば聞こえはいいが、現実的には異文化接触あるいは異文化対立をどのように処理するかということである。むしろ、海外における日本研究の方法は、地域研究に資するところ大きなものがあると思われる。その地域を内から見直すだけでなく、外から客観的に観察することは、最も重要な視点である。また、その成果を、その地域だけにとどめず、積極的に地域の外へ発信することも、地域学の大きな役割である。

この二つの視点が方法化されるならば、それが地域学の普遍的な方法になりうると、思量する。地域独自の方法ではなく、普遍的な方法こそが、われわれが堺・南大阪地域学をあらたな地域学として考えてゆく目的、指針となるものである。

以下、上記の方法によって、堺・南大阪地域を対象に、歴史文化、現状、街づくりの観点から、具体的な課題を考えてみることにする。

Ⅲ．堺・南大阪地域の歴史環境

地域の相対化と異文化交流という二つの方法から、南大阪地域の具体的な地域特性を考えてみよう。とくに、人文科学的な視点が中心となるのはいなめない。個別の例を示しながら、その課題となる事項について整理してみる。

Ⅲ－1．古代の南大阪地域

5～6世紀代の南大阪地域は、西の大仙古墳（伝仁徳天皇陵古墳）を中心とする百舌鳥古墳群と、東の誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵古墳）を中心とする古市古墳群に代表される、巨大古墳群に特徴付けられる。古代史の方面では河内王朝を考える向きもあるが、その正否は別として、これら巨大古墳の主とされる応神・仁徳の時代は、対中国では倭の五王が朝貢した記録が宋書に残るし、また、記紀には朝鮮半島との関係や渡来人の活躍がさまざまに記録されている。この時代、まさにアジアの中に日本があった。

記紀には応神天皇の時代に、論語と千字文とともに王仁（和迩）博士が来日したことを伝え、また、古今集仮名序には、仁徳天皇時代の事跡として「なにはづ」の歌と王仁博士の故事を伝える。

> 又科賜百濟國、「若有賢人者貢上」。故、受命以貢上人、名和迩吉師、即論語十卷・千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進〈此和迩吉師者、文首等祖〉。（古事記中巻）
>
> 十六年春二月、王仁来之。則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。所謂王仁者、是書首等之始祖也。（日本書紀応神紀）
>
> なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり。〈おほさゝぎのみかど、なにはづにて、みことときこえける時、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、三とせになりにければ、王仁といふ人のいぶかり思ひて、よみてたてまつりける哥也。この花はむめの花をいふなるべし。〉（古今集仮名序）

南大阪に巨大古墳群が造営された時代は、また、朝鮮半島を経由して、文事が盛んになった時代でもあったのである。近年、続々と発掘される7世紀の仮名書き木簡の多くが「なにはづ」の歌であるのは、この伝承に基づくものであったと考えうる。日本語の文（歌）が仮名（漢字の表音用法）で記されることが7世紀に成立する、その仮名の習得に「なにはづ」の歌が尊重されていた。この歌が、王仁の名とともにこの時代の事跡として伝わることは、渡来人によって日本語書記の工夫が行われたことを想像させる。記紀には、文事をことした東漢氏（やまとのあやうじ）と西文氏（かわちのふみうじ）との所伝を伝えるが、渡来系の人々を中心として、日本語を書記するさまざまの工夫がなされたものと思しい。その端緒が、巨大古墳を造営した人々によって開かれたのである。それは、外交と無縁ではない。そもそも漢字によってことばを書きとめる必要は、そこから発したはずだからである。

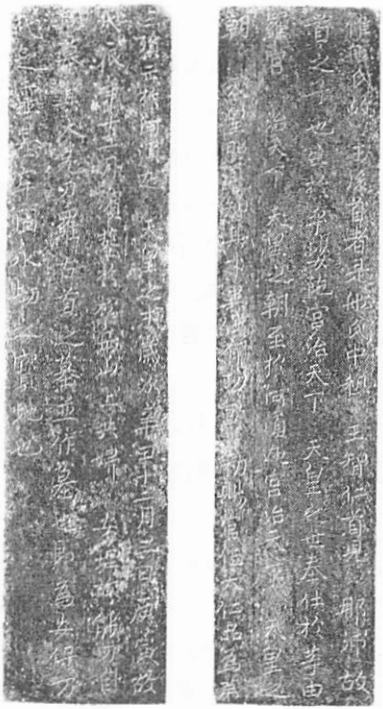
海外から多くの文物がもたらされた時代、その玄関口となったのが、難波宮である。仁徳天皇の長柄豊崎宮以降、7～8世紀代の難波宮は、副都として繁栄した。

海外からの文化は、難波宮から南大阪地域を通過して飛鳥・藤原あるいは平城の都へともたらされた。上町台地の北端に位置する難波宮から道は真南へと下り、四天王寺、住吉大社を経て、大仙古墳（伝仁徳天皇陵古墳）につきあたって左折（東進）し、飛鳥へと続く。これが竹之内街道である。南大阪地域の部分では、途中で二つに分かれ多治比道ともよばれる。この街道沿いには、王仁を祖とする西文氏をはじめとして、津守氏・葛井氏など渡来系の氏族が多く居住していた。ある意味、文化の先進地域でもあった。街道は、文化の単なる通過点ではなく、文化の根付く地域でもあったのである。

奈良時代になると、難波大道といわれる街道は、四天王寺から東進し、途中から大和川沿いに平城京へと進むことになってしまう。現国道25号線に相当する道筋である。この時代になると街道は北にぶれることになり、中河内（現八尾市・柏原市あたり）が街道筋となる。大

和川左岸を大和に抜ける直前、現柏原市にある朝鮮式の後期古墳、松崗山古墳から出土した船王後の墓誌（資料５）は、その時代のこの地域の文化事情を物語るものである。

【資料５】船王後墓誌



（裏）　　（表）

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『古代日本の墓誌』による

さらに、都が平安京に移ることによって、難波の津から淀川をさかのぼる水路が文化が通過する街道となる。ただし、９世紀末に遣唐使が廃止されることによって、体外的な関係は途絶えることになる。中国との交通は、12世紀の福原（現神戸市）の港での対宋貿易を待つことになる。

延喜元（901）年、菅原道真が大宰府に左遷される道すがら、伯母である覚寿尼に別れを告げるため、道明寺に立ち寄る。この地域は土師氏（菅原氏）の本拠地でもあり、道明寺（土師寺）はその氏寺であった。道明寺天満宮には、その時の道真の遺品が伝わる。別れに際して、道真は、

鳴けばこそ別れを憂けれ鶏が音のなからん里の暁もがな

と詠んだ。後に学問の神様と崇められる道真が、この地に伝承を残すのも、やはり、この地域の先進性を暗示するかのようである。近世になると、道明寺は京の文芸をこの地で受容するその中心のひとつとなるが、古代からの土地柄がそれを可能にしたことはいうまでもない。

《課題》

南大阪地域の古墳群やこの地域を本拠とする古代氏族について調べてみよう。研究書だけでなしに、記紀等の史料や調査報告書など、実際の基礎資料にあたって考えること。

Ⅲ－2．熊野街道と高野街道

難波から紀州へ伸びる街道には、熊野街道と高野街道とがある。平安時代には浄土思想の影響から、熊野詣が盛んになる。10世紀ごろから、記録に見られるようになるが、なんといっても、12世紀末に後鳥羽天皇が頻繁に熊野に詣で、藤原定家をはじめ多くの貴族が同行した。彼らは道すがら歌を詠じ、懐紙に書きとめた。世に熊野懐紙と呼ばれる。平家物語には、喜界が島に流された新中納言康頼らが、熊野権現を勧請し都に帰ることのできたという話がおさめられている。

その街道には99の王子がおかれた。水路淀川を下り渡辺の津（現大阪市天満橋付近、江戸時代の八軒屋）に下りて、最初の王子が窪津王子、そこからやはり南下して、仁徳天皇陵の西側をさらに南下する。現JR阪和線にほぼ沿って紀伊国へとつながる。この道を小栗判官が土車に引かれて新宮へと復活の旅をしたことから、小栗街道とも呼ばれる。説経「をぐり」はこの街道を舞台として伝えられたのである。また、安部清明の葛の葉伝説もこの街道を通る人々によって伝えられ、

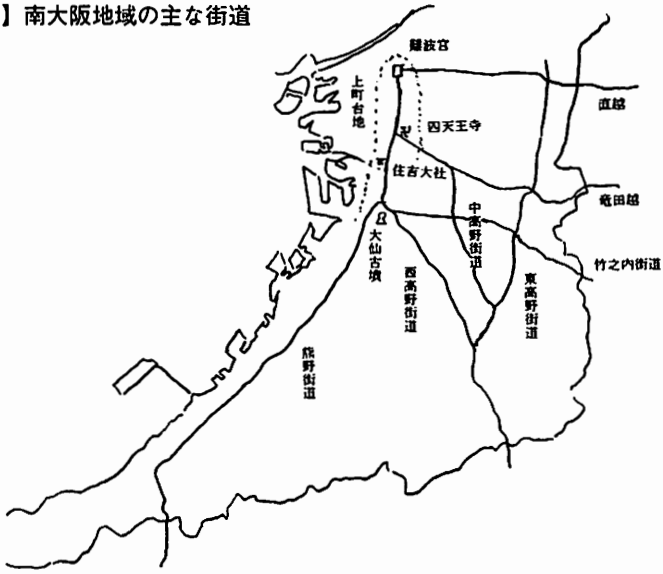
成長していった。

高野街道は、京から陸路をとって、八幡市、枚方市、交野市から河内平野の東側を南下し、東大阪市、柏原市、羽曳野市、富田林市、河内長野市を通る東高野街道（現在、国道170号線に沿ったルート）と、平野郷から狭山に抜ける中高野街道、そして、難波の津から南下し、やはり仁徳天皇陵を東に折れて南下する西高野街道（現在の国道310号線に沿ったルート）とがあり、河内長野で合流して紀見峠から橋本へ抜けてゆく。この街道を高野聖と呼ばれる人々が往来した。彼らはやはり説経節を通して、「かるかや」などの物語を伝える。熊野街道にしても高野街道にしても、ひとつには宗教・信仰の道であるが、それは、文芸が通い成長する道でもあった。このことは、どの街道筋に対してもいえる。また、それぞれは深いつながりを有する。説経が数多くの街道を舞台とすることがそれを証明している。街道は、文芸を伝え、成長させる装置として理解されるのである。

《課題》

南大阪地域を通る交通路について調べてみよう。

【資料６】南大阪地域の主な街道



Ⅲ－3．中世堺の繁栄と異文化交流

戦国時代、西洋の宣教師たちは難波を避けて堺港から日本の地を踏んだ。その結果、堺は南蛮貿易と鉄砲の生産で巨額の富を得て、戦国時代をおさめるキャスティングボードを握ることになる。同時に、堺という独立都市は、ひとつの機能として、西洋文明が京都を中心とする日本に伝播するひとつの道すがらであるという機能を有している。さまざまの文物が堺から京へと伝播していった。

一方で、応仁の乱による京都の文化の地方への流出のひとつの受け皿ともなった。千利休によって大成される茶道は、その代表であるが、連歌師長伯や堺版のことはあまり知られていない。個別の事象として、堺版について考えてみる。

Ⅲ－3－1．堺版

世に堺版という一群の出版物がある。一般の辞典類には、

> 室町時代貿易港として栄え、戦渦に巻きこまれなかった泉州堺には住民の富裕な財力を背景に学芸愛好の風が興り、当時この地で出版された刊本を堺版という。…（中略）…後者（節用集）の刊記に経師屋と名乗っているから、営利出版の走りと見られる。従来、わが国の出版はほとんど仏典のみで、また刊行者は寺院か為政者に限られていたが、堺版は当時盛んになりだした外典講学の風を反映して積極的に当代盛行の外典を民間人が出版したもので、中世から近世へと推移して行く時代の先駆的動向を象徴している。　『国史大辞典』（阿部隆一）

> 堺で出版された本。江戸時代以前についていう。…（中略）…これらの出版の背景には、堺が貿易・商業の拠点として繁栄したことによる富の蓄積があるとされる。ただし正平版『論語』の後が百三十年以上途切れており、特に室町後期―末期に偏ることには注意すべきであろう。すなわち、阿佐井野版以下は応仁の乱以後における文化の地方拡散の例と見なすことも可能で、『三体詩』

版木の京都から和泉への流伝に象徴されるように、京都の文化的没落が促した現象と捉える視点も必要と思われる。…

『日本古典籍書誌学辞典』（落合博志）

のように、説明されるものであり、具体的には、

1、正平版『論語集解』（正平十九〔1364〕年）

2、阿佐井野版

①明暦三年版『三体詩』後印本

②『医書大全』（大永八〔1528〕年）

③天文版『論語』（天文二〔1533〕年）

3、宗仲版

①『韻鏡』（享禄元〔1528〕年）

②『大日本国帝系紀年古今一覧之図』（享禄四〔1531〕年？）

4、石部了冊刊本

①『四体千字文』（天正二〔1574〕年）

②天正十八年本『節用集』（天正十八〔1590〕年）

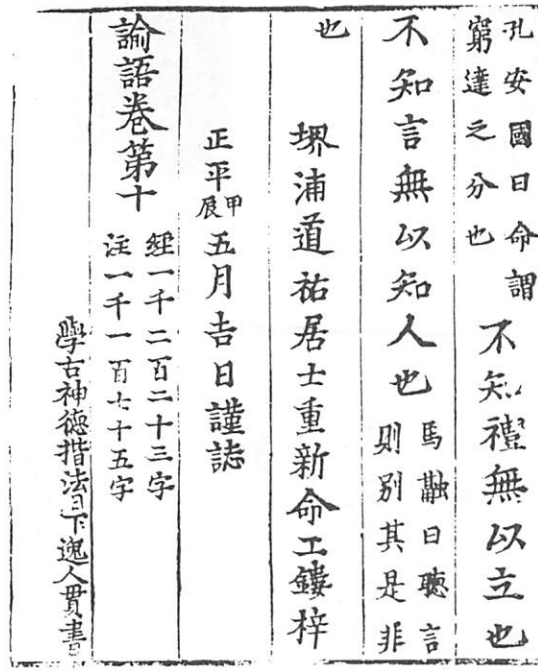
の四種八本が知られている（資料7）。

Ⅲ－3－2．禅宗寺院との関係

この中で、正平版『論語集解』は群を抜いて古く、他の7本とは区別して考える必要があるが、一方でこれと天文版『論語』との関係を考えるならば、堺版の筆頭にこれがあり、以下への影響を考えることもあながち無理な話ではない。

正平版『論語集解』には、「堺浦道祐居士重新命工鏤梓／正平〈甲辰〉五月謹誌」の刊記があるが、いくつかの異版が確認されており、比較的長い期間に刷られていたと思しい。これは応仁の乱以前のものでもあり、当時の堺の地位から考えても、むしろ京都との関係は十分に注意せねばならず、とくに背景に禅宗寺院の存在も考えられ（後述）、あるいは板自体は京都にあったというようなことも考えねばならないのかもしれない。すくなくとも、無刊記本まで含め、全ての版が堺で行われたと考えるには、慎重でなければならないだろう。ただし、だと

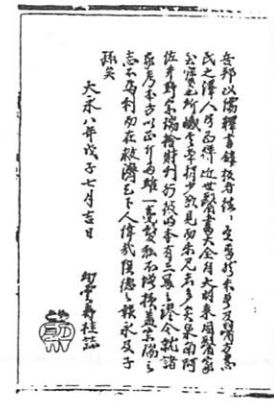
【資料７】堺版のさまざま


孔安國曰命謂窮達之分也　不知禮無以立也
不知言無以知人也　馬融曰聽言則別其是非也
堺浦道祐居士重新命工鏤梓
正平甲辰五月吉日謹誌
論語卷第十　経一千二百二十三字　注一千一百七十五字
學古神德措淸[illegible]下邈人貫書

1　正平版『論語集解』

明應甲寅之秋前相國天先生謹刻之在京師者歲大于丁亥亂以故指賞刊行集置於萬年廣德寺[illegible]
此板流傳自永孟帝[illegible]於毛阿佗非[illegible]宗複賜以置之於家塾也敬斤指之者以待方來矣

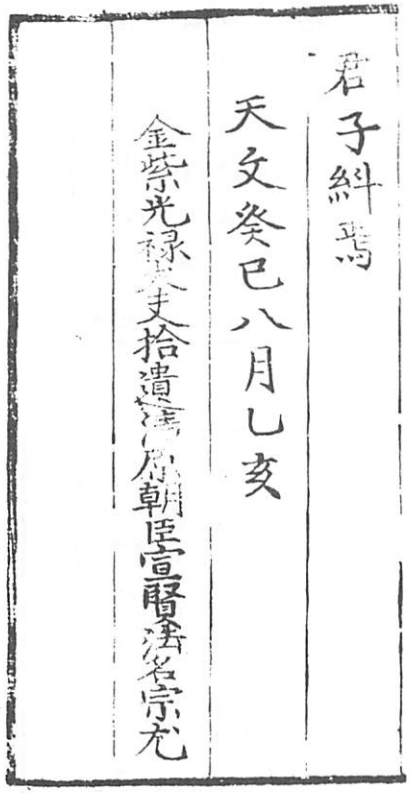
2①　三体詩


大永八年戊子七月吉日

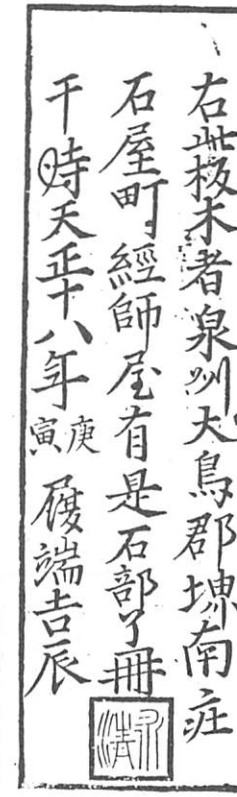
2②　医書大全

2③　韻鏡

2④　四体千字文



3　天文版論語



4　天正十八年本節用集

1～2　汲古書院『日本印刷史』による
3　南宗寺複製本による
4　東洋文庫複製本による

しても、これが内典刊行の嚆矢をなすものであることは動かないことであり、そこに「堺浦道祐居士」がかかわっていたこともまた事実である。

2と3とは、およそ十六世紀に入ってからのもので、応仁の乱によって、京都の文化が地方へと流出したことを受けたものと、まずは考えられる。明暦三年版『三体詩』後印本の跋文に、

> 此板、流伝自レ京至二泉南一。於是、阿佐井野宗禎、贖以置二之於家塾一也。欲三印摺之輩以待二方来一矣

とあり、板木が京より流出し泉南の地にたどり着いたことが述べられている。これにかかわった阿佐井野宗禎は、おそらく次の『医書大全』の刊行にかかわった阿佐井野宗瑞と同族であろう。阿佐井野宗瑞については、『医書大全』の刊行とかかわって久保尾俊郎「阿佐井野宗瑞と『医書大全』の出版」（早稲田大学図書館紀要42）に考証があり、堺の豪商野遠屋の流であり、おそらくその財力を背景に京都の文化を堺の地に伝えたものと思しい。

もともとこの『三体詩』は明応三年に京都五山の一つ相国寺の僧光源和尚（葉巣子）によって版行されたものであり、阿佐井野宗禎と五山との関係が認められる。そもそも、本邦の出版の歴史を紐解くに、中世において出版の事業が盛んに行われたのは、五山を中心とする禅宗の寺院においてであり、世に五山版と称される。禅宗寺院における出版が、それ以前の春日版や高野版と異なる点は、仏典のみならず夢窓国師の語録や詩作のための辞書や詩集も含んでいる所にある。この『三体詩』もその一環であり、また、宗仲版の『韻鏡』その流れで考えることができよう。

阿佐井野版『医書大全』には、京都五山の一つ建仁寺の幻雲（月舟）寿桂による跋文がある。

> 我邦以二儒釈書一鏤板者往々有焉。然未三曽及二医方一。恵レ民レ之沢二人皆一則鮮。近世医書大全自二大明一来。固医家至宝也。所レ憾其本稍少欲レ見而未レ見者多矣。泉南阿佐井野宗瑞捨財刊行。彼明本有二三写之謬一。令レ就二諸家考本一方以正。斤両二一毫髪一私不二増

損一。蓋宗瑞之志、不レ為レ利而在二救済一天下人一。偉哉、陰徳之報、永及二子孫一矣。／大永八年戊子七月吉日／幻雲寿桂誌

当時、仏書や儒書は板にのぼることはあっても医書においてはまだ、巷間に流布することはなかった。そこで私財をなげうってこれを版行する。これは利を求めるのではなく、人々を救済するためである。その志によって、陰徳の報は長く子孫に伝わるであろうというのである。医書の出版の魁となるものであるが、ここにも堺の財力と五山との関係がうかがわれる。当時、商人の財は、単に利益を追求するのではなく、それを何らかの形で社会に還元するのが、堺商人の考え方であった。それが免罪の証でもあった。堺の多くの文化が商人の財力に基づくのもそのような思想による。

天文版『論語』は、南宗寺版ともいわれ、先の正平版『論語集解』につぐ古板であり、大正五年に内藤湖南の序を付して複製されている。その来歴については、細川潤次郎の解説「天文板論語考」に詳しい。この板木が南宗寺に伝わった経緯はともかくとして、阿佐井野氏と南宗寺との関係は深かったものと見られる。それは、『医書大全』における五山と阿佐井野氏との関係に通じるところがある。

また、宗仲については、その伝記が明らかではないが、同じく堺の禅宗の名刹海会寺との関係が考えられている。つまり、阿佐井野版にしても宗仲版にしても、禅宗寺院との関係が顕著であり、広義の五山版の流れを汲むものと理解される。落合氏の「京都の文化的没落が促した現象」という指摘は、地方への伝播という面も含めてとらえるならば、ある意味、首肯できるのであるが、そこに地方の禅宗寺院が関係していたことも考慮しなければならないだろう。

京都からの伝播ということでいうと、清原宣賢の関与も注意される。つまり、阿佐井野版の『論語』と宗仲版の『韻鏡』の跋文が清原宣賢によるものである。これらからは、堺の商人たちと京都の堂上との交流が考えられ、単に京都からの文化の没落という面だけではとらえがたい、まさに交流という方が適切なそんな状況にあったものと思われる。

いずれにせよ、内典に対する外典刊行の魁となった点で堺版は、わが国出版史上に名を残すことになったわけだが、阿佐井野版や宗仲版というのは、京における五山版の出版技術の上に立って、京と堺との交流の上に成り立った出版といことになろう。その点では、広い意味での五山版の末流に位置するということも可能であろう。

Ⅲ－３－３．通俗出版業の魁

これに比べると、石部了冊刊本は、他と様相を異にする。

> 此板泉州大鳥郡堺南荘石屋町住石部了冊入道新刊。巧極妙字□真奇哉。于時天正二年六月吉辰／宿蘆斎書焉（『四体千字文』）
>
> 右此板木者泉州大鳥郡堺南荘石屋町経師屋石部了冊／于時天正十八年〈庚寅〉履端吉辰（天正十八年本『節用集』）

この刊記に見られる経師屋石部了冊は、本屋のごとくであり、『四体千字文』や『節用集』といったいわば俗書が版行されるのは、先に見た堺版の多くとはことなり、そこに職業としての出版、つまり営利出版が考えられる。ただ、「入道」「経師屋」という記述からは、いわゆる俗者というのではない寺院関係の人物像が浮かび上がり、その点では、単なる営利出版でない何らかの事情を考える必要はあろう。この後、古活字版の時代を経て整板版の時代をむかえ、本格的に出版事業が成立していくのとは、ある意味区別されるべきものであり、これをその魁とするかどうかは、今は慎重でありたいところである。

節用集は、中世から近世を通じて広く流布した通俗辞書である。その成立については、和漢連句との関係も指摘されており、一概に通俗辞書というには問題もあるが、すくなくとも江戸時代から明治時代にかけては、辞書の代名詞として川柳にも読み込まれるほど、庶民生活に身近なものであった。

江戸時代以前の節用集を古本節用集と呼ぶ。古本節用集は、最初の見出し語によって、伊勢本、印度本、乾本にわけられ、ほぼその順番に成立したものとされている。そのうち、板本になったものとして、伊勢本である今取り上げている天正十八年本（堺本）と饅頭屋本、乾

本である易林本（慶長二年刊）がある。このうち易林本は、これをもとにした草書本が続いて刊行され、近世流布の節用集の基となる。以後の節用集はそれぞれに形態を異にしても、ほぼ易林本の影響下にあるといってよい。この易林本は、跋文に次のように記すけれども、別に指摘したように極めて規範性の高いものであり、当時の通俗の言語意識を代表するようなものではなかったと思われる。

有レ客携二鉅巻一曰、此節用集十字九皆贋也、正二諸於韻会・礼部韻一、諾則命レ工刻レ梓焉。如二愚夫弄麞一、何弁二字画之誤一哉、惟取二定家卿仮名遣一分二書伊為越於江恵之六隔段一以返レ之。旹慶長二〈丁酉〉易林誌

その点でいえば、天正十八年本（堺本）と饅頭屋本とは見出し字の書体も行書に近く、字体も通俗的なものが含まれ、規範性においては易林本に譲るところがある。これは言い方を変えれば、それまでの節用集にみる緩やかな規範が、かえって易林本の規範を導いたとも考えられよう。その意味で、天正十八年本（堺本）と饅頭屋本との版行は、後の近世流布の節用集版行につながるものと思われる。

さて、天正十八年本は見たとおり、泉州大鳥郡堺南荘石屋町の住人、経師屋石部了冊によるものであるが、おそらくこれは裕福な堺の富によるところが大きかったと思われる。また、饅頭屋本は大和の豪商饅頭屋林宗二との関係が問題にされている。これは、やはり堺を中心とする文化的な高揚によるものであり、饅頭屋林宗二と堺との関係もさまざまに取り上げられるところである。このように商人の富を通俗書の刊行に費やすことは、『医書大全』の跋文に月舟寿桂が「不レ為レ利而在三救済二天下人一」というように、「捨財」は商人たちの一つの救世の手段であったものと思われる。つまり、堺の富による外典の刊行は、石部了冊版も含めて全体として営利出版ではなく、むしろ、富の還元によって自らの安穏を願う喜捨事業の一環としてあったのではなかったかと思量されるのである。営利出版は、やはりもう少し後、古活字版の時代を経た後の整版の大量印刷による時代をまたなければならないだろう。

堺版は、それぞれに版行の事情は異なるけれども、基底にあるのは堺の富であり、その社会への還元（喜捨）が、この時期に外典の版行を導いたものと思われる。たしかに、その社会的背景には、応仁の乱以降の京の文化的没落、地方への流出という面があったけれど、見たように堺商人と京五山との関係は密なるものがあった。その点では、やはり京を中心とする文化活動の延長にあるという面も否定できない。出版という観点からすれば、五山版にはっきりとつながっているものなのである。（以上、上方文化研究センター年報第４号所載拙稿参照）

以上、京と堺との文化交流という面から見ても、たしかに堺の富という独自の要素はあるが、けっしてそれはこの地域に独自のシステムとしてあるものではない。すべて、文化の相対化、異文化の接触という観点でとらえうるものなのである。

《課題》

堺版以外にも「堺包丁」「堺歌壇」など「堺―」と堺の名がつくものは多い。それぞれの来歴について調べてみよう。

Ⅲ－４．大和川の付け替え

現在の大和川は、東から流れ込んでくる大和川本流と、南から流れ込む石川の合流地点（柏原市）から西に大阪湾へと向う。これは、宝永元（1704）年に中甚兵衛の努力によって付け替えられたもので、それ以前は、合流点から北へ向って数本の流れとしてあり、淀川に流れ込んでいた。合流点から淀川までは、古来、内海であったところで、高低差がほとんどなく、水の流れが悪く常に水害に悩まされていた。この付け替えによって、中河内の水害が解消され、綿花栽培によって安定した産業をもたらすことになる。しかしながら、新大和川には水争いや悪水抜きのためのさまざまな問題が降りかかることになる。また、堺港に多量の土砂が流れ込んで、港としての機能に支障をきたすようになった。その結果、堺港は衰退し、港湾機能は再び大阪港（難波の津）あるいは神戸港に移ったという（上方文化研究センター年報第４号中九兵衛好幸氏報告）。ただし、堺港の繁栄は、戦国時代という

時代性によるところも大きいと思われる。瀬戸内海を東行して商都大坂に着き、また、淀川をさかのぼる街道筋を考えるならば、大坂港は断然有利な位置にあったはずである。大坂から京へ、淀川の水路は江戸時代、江戸への重要な街道であった。その起点としての難波の津（八軒屋）は、物資の積み下ろし港としてにぎわっていた。その様子が摂津名所図会に描かれている。むしろ、新大和川の影響は、難波の津から南下していたルートが切断されたことにあるのではなかろうか。

川も街道と同じく、地域の文化に大きな意味を持つものである。それ以前に、摂津国と和泉国の境界が堺の大小路であったのが、新大和川があらたな境界となる。現行の大阪市と堺市との境界となっているのである。

もちろん、文化的なつながりはそう簡単に変更できるものではなく、たとえば、住吉大社とのつながりは、現在の堺旧市街では今もなお強く残っている。しかしながら、古代からの重要な街道であった陸路の分断が、南大阪地域の街道としての特色を失わせる結果となったと思われるのである。なによりも、川による精神的な分断は、決定的であった。それ以前は、つながっていたはずの摂津から和泉、河内をふくむ上方地域から、まさに、南大阪地域が誕生したのである。

《課題》

大和川付け替え以前と以後での、南大阪地域の産業について調べてみよう。

Ⅲ－5．南大阪の文化遺産

以上述べきたった街道と文化接触という観点以外にも、この地域を特徴付ける歴史的な遺産は数多くある。古代の大規模土木工事としての狭山池、依羅池の開鑿は記紀に残るところであるし、その伝統は奈良時代の行基の事跡へと続く。

隠者としての西行の足跡は、都を離れた人々が地域に文芸をもたらすことになる。都を離れた人々と都とのつながりは、源義家に代表される河内源氏の存在や楠正成の忠誠など、この地が歴史の舞台となる

こともままあった。なによりも、戦国時代の堺の輝きは、古代、先端的な高い文化地域であったことに匹敵するであろう。その影響下に、近世の南大阪は農村が豊なこともあって、地下の文化が京とのつながりで高いレベルにあったことがうかがわれる（公開シンポジウム報告書「南大阪の文化基盤」）。近代に至っても、堺県は奈良県も包含するくらいの広がりを持っていたし、なにより紡績をはじめとする先進的な産業が次々と生まれてきた。

古代より、南大阪の文化基盤は潜在的な力を蓄えつづけてきたのである。

《課題》

以上に触れた以外の文化遺産について、どのような課題があるか調べてみよう。

【補注】

平成18年度「南大阪の歩き方」報告書には、竹之内街道、熊野街道、西高野街道をテーマにした、大阪府立大学チームの報告があり、文学や文化と街道との関係を観光にどう生かすかが模索されている。

Ⅳ．堺・南大阪地域学の展望

以上見てきたように、堺・南大阪地域学の対象地域は、歴史的に見て非常に高い潜在能力を有している。にもかかわらず、現状は関西空港に象徴されるように、問題が山積し、人口の推移や生産力から見ても停滞しているといわざるをえない。近年、各地で町おこしがいわれるが、町おこしをせざるをえないのが現状なのである。

しかしながら、文化的に高いポテンシャルはそれを活かすことで、多様な取り組みを可能にするであろう。ここでは、祭りの復活を例としてあげて、われわれが取り組むべき堺・南大阪地域学の方法の指針とする。やはり個別の事例として、2004年に43年ぶりに復活した、堺市土塔町の布団太鼓について述べる。

Ⅳ－１．布団太鼓の復活

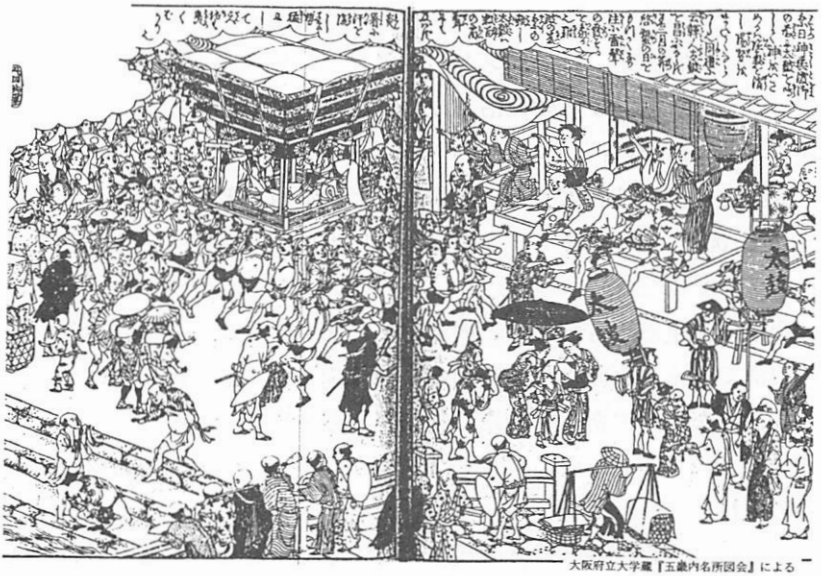
百舌鳥八幡宮では、毎年、月見祭として布団太鼓が奉納されている。布団太鼓とは神輿の一種であるが、上に布団を五枚敷いたような特異な形態をしており、なかで子供が太鼓をたたく。この形の神輿は淡路島を中心として、瀬戸内地域、摂津、泉州、河内、大和に分布しており、布団ダンジリ、太鼓山などとも呼ばれる。近畿の布団太鼓はその構造から、淡路型、堺型、大阪型、貝塚型、八尾型などに分類される。百舌鳥八幡宮に奉納されるのはすべて淡路型である。その起源については明らかではないが、摂津名所図会（資料８）には堺に布団太鼓のあったことが描かれている。南蛮貿易で財を成した堺の豪商が、堺型の太鼓台を建造したことに始まるといわれる。堺北町の開口、菅原両神社を中心とする祭礼において、布団太鼓が奉納されていたようである。

百舌鳥八幡宮の布団太鼓は、歴史的に見てそう古くはない。大正２(1913) 年、菅原神社に奉仕されていた戎島北浜の太鼓台が売りに出されたのを、梅南地区（現梅町）が入手したのが、百舌鳥八幡宮の布団

太鼓のはじまりとされている。その後、昭和初年に百舌鳥八幡宮の氏子である他の町も太鼓台を購入して今の原型を築いたようである。戦災で市内の太鼓が焼けた中、百舌鳥八幡宮のは戦災を免れて、一躍有名となった。

摂津名所図会には、盛夏の行事として描かれているが、百舌鳥八幡宮では月見祭と結びついて、毎年、中秋の名月の日に奉納されることになっている。ただし、近年では担ぎ手の事情も変わって、平日では休みが取りにくく、中秋節に一番近い土日に行われる方向にある。百舌鳥地区の布団太鼓にかける意気込み、情熱は並大抵ではなく、それが、今日の盛況に結びついているのである。

【資料８】布団太鼓



大阪府立大学蔵『摂津名所図会』による

現在、百舌鳥八幡宮に布団太鼓を奉納するのは、赤畑町、土師町、中百舌鳥町、梅北町、本町、陵南町、西之町、梅町、土塔町の９町であるが、このうち、土塔町のは2004年に43年ぶりに復活した、もっとも新しい太鼓台である。

土塔町の布団太鼓は、昭和36（1961）年の第二室戸台風で崩壊した。それがすぐに復活しなかったのは、財政的な面もさりながら、太鼓台の維持に要する労力にあったようである。地元の方言で「あんなおとろしいものを」というのが、本音であったそうだ。昭和50年ごろに一度、復活の声があがる。それまで、祭りになると他の町の太鼓がうらやましく思われた人々が中心になってアンケート調査が行われたが、やはり「おとろしい」のと、中秋祭は平日になることもあり、サラリーマンが増えてきたこの地区の住民には、平日の休暇は難しかったこともある。

太鼓のたたき手は小学6年生であった。第二室戸台風のときにその年齢であった、つまり、太鼓台に乗って太鼓をたたく予定だった人たちにとっては、太鼓台の復活には、格別の思いがあったという。そんな有志が一人二人と集まって、もう一度、復活の運動に乗り出した。平成10（1998）年、再びアンケート調査が行われたが、50%程度の賛同しかえられず、すぐの復活とはならなかった。しかしその後も、発起人となった120名くらいの人々によって、淡路島からレンタルした布団太鼓を町民の体育大会で披露するなど、地道な努力が続けられ、平成13（2001）年のアンケートでは80%以上の賛同を得て、復活が決定されるに至った。

復活の決定からも、なお、困難は多々あった。なにしろ、43年ぶりの復活である。当時の事情を知るものは少ない。他の町からはお手並み拝見的な反応である。また、参加するからには他の町との関係も重要である。さらに、なによりもたいへんな行事を継続する組織作りが求められた。

土塔町は、百舌鳥八幡宮の氏子の町の中でももっとも離れた位置にある。また、あらたな住宅開発によって住民となった人々も多い。担ぎ手を安定して維持するには、そんな新住民の力も必要である。そこで、町会と連動する形で、保存会と運行委員会を組織して、町をあげての組織とすることで、多くの賛同と協力を得ることにした。

布団太鼓は通常、6〜70人で担ぐが、重量から考えて一度に歩けるの

は100mが限度である。ただし、それだけ歩けば次に担げるまで相当の休養が必要になる。そこで、土塔町では70人程度の班を３班設けて、一班80mずつで交代制をしいて、綿密な計画の下、百舌鳥八幡宮をめざすことにした。道路に交代地点のマークをつけて組織的に交代しながら、持続性を保つようにしたのである。

平成16（2004）年、みごとに復活した土塔町の布団太鼓は、他の町からも大きな祝福を受けた。ただ、まだまだ問題は残っている。継続的に布団太鼓を維持していくための努力は、これからも続くのである。(2005年度南大阪の歩き方報告会資料)

土塔町の布団太鼓の復活は、現在の住宅事情が抱えている悩みに対して、ひとつのモデルケースとなる取り組みであると思われる。伝統的な祭りに新しい住民は入りにくいし、現にそれを拒む地域もある。しかし一方で、新たな住民を取り込まなくては、伝統的な祭りを維持できない事情もある。そこを克服して、土塔町が今後、布団太鼓を維持していけるかどうかは、実は新住民との融和が必須となってくると思われる。その意味で、新住民を取り込んだ形で、まずは復活したことは、これからの町の運営にもよい結果をもたらすに違いない。ただ、これを継続的に維持していく努力はこれからも必要であるし、さらに開かれた運営が要求されるものと思われる。一つの目的を持って住民が、新旧を問わず結集できる何かが、これからの街づくりに有効に働くと、この事例からは思われるのである。

《課題》

文化遺産と現代の生活とのかかわりについて個別の事例を調査し、これからの生活にどのように活かすことができるか考えてみよう。

Ⅳ－２．大学連携と地域貢献

本取り組みでは、この堺・南大阪地域学を地域で共有して発展させるために、堺・南大阪地域学フォーラムを組織する（資料９）。われわれがめざす堺・南大阪地域学は、図に示すように、産官学民四者の連携によって成り立つ。そのうち、では大学がなすべきことは何か、最

【資料9】堺・南大阪地域学フォーラムの概要

大学

地域活性化実現のための研究

〈堺・南大阪地域学〉の提唱

・地域の歴史文化の再発見という文化研究

・地域の現状と課題の再認識という現代社会研究

・文化遺産を活かし現状を踏まえた街づくりへの提言

地域住民

地域活性化実現のための原動力

・個々の考えるよりよい街づくりを提案

・さまざまな取組のNPO法人の活動

・地域における草の根活動

堺・南大阪地域学の共有と相互協力

企業

地域活性化実現のための技術開発

・提言の実現に向けた技術開発

・観光資源の開発

・まちづくりへの支援事業

地方自治体

地域活性化実現のための計画策定

・提言の実現に向けた政策の提案

・まちづくりの設計

・市民活動の支援

具体的な活動

・研究活動

コンソーシアムのネットワークを活かし、南大阪地域の大学の知を結集し、堺・南大阪地域学の確立をめざします。そのために、年次大会として公開講演会、シンポジウムなどを行うとともに、随時、研究会の開催や、地域学関係資料の収集など、幅広い研究活動を行い、また、一般に公開します。

・連携活動

地域活性化や豊かなまちづくりの提案を、市民の方と共同して行い、その実現に向けての活動を支援します。さまざまな活動の紹介や、議論の場を設けるために、年次大会においてシンポジウムやポスターセッションを開催し、また、必要に応じて活動報告会や連絡会を開き、活動の横の連携をめざします。

・広報活動

これから行う研究活動や連携活動を地域で共有するとともに、広く全国や海外に発信するために、会報と研究論集、実践報告書などを発行します。これによって、他の地域との連携を図り、また、さらに新しい視点の獲得につなげていきます。

後に触れておきたい。

フォーラムの目的は、産・官・学・民が堺・南大阪地域学を共有し、相互協力によって、地域の活性化をうながし、新しいまちづくりをめざすものである。大学と企業の間では、地域振興のためのさまざまな技術開発の協力が、大学と市民活動との間では、さまざまな提携が可能である。このような相互協力を積み重ね、フォーラムに結集することで、多角的な視点からの総合的なまちづくり提案を、自治体に行うことができ、自治体でもそれを、現実的な提案として、具体化する方策が採られるようになるであろう。それを、現実化する原動力として、四者の協力は有効に働くものと考える。

このうち大学が行うべきは、それぞれの研究にほかならない。大学における研究が地域に活かされるべきであること、言をまたない。それが直接に地域に関係しなくても、何の問題もない。地域の相対化と異文化の交流という観点に立てば、大学でおこなわれるすべての研究が、地域のために寄与できる部分を含んである。要はそれを個々で個々の独立したものとして見るのではなく、堺・南大阪地域学という目的のための方法の一部として認識することである。

堺・南大阪地域学がさまざまな分野の学を総合した形で成立することを考えるならば、南大阪地域大学コンソーシアムの存在は重要である。本取り組みが、コンソーシアムとの連携を前面に打ち出すのも、そのためである。

南大阪地域の各大学においては、地域に密着した研究を推し進め、また、地域との関係を密にするために、2002年から「南大阪地域大学コンソーシアム」を組織し、大学間の連携を強めてきた。コンソーシアムの事業は、単位互換や高大連携授業といった大学間連携事業だけでなく、大学･企業共同プログラムとして、研究者データベースを利用して、産学連携促進事業の開発や、関空研究会、インターンシップ、学生クラブ・アクトなどの産学協同事業、また、南大阪地域講座によって、市民への知的情報の提供など、地域に密着し、地域に貢献できる事業を心がけてきた。今まで、個別の研究機関の集合だったものが、

一つの組織として、総合的に活動することによって、一つの大学ではできなかった、それぞれの思い描く地域貢献が、大学間の協力によって実現しやすくなってきたといえよう。

先にあげた布団太鼓復活の事例も、コンソーシアムが企画した、南大阪の歩き方の一環として、フィールドワークを行った成果である。また、関空の活用や、泉北ニュータウンの現代的な課題については、学際的な研究がスタートしている。一つの大学ではまかなえない方法の集積が、堺・南大阪地域学を総合的な学問へと導くものと思量する。

《課題》

南大阪地域の現代的な課題をみつけ、それを解決するのに必要な学問分野について考えてみよう。

Ⅳ－3．堺・南大阪地域学の展望

「従来の学問（アカデミズム）は、地域などがもっている現実性を捨象して、純粋抽象論の上に構築されてきたが、20世紀のアメリカ的なプラグマティシズムは現実的な有効性や総合的な確実性を求めるようになった。地域学はその成果である。」と中西進は指摘する。（堺・南大阪地域学フォーラム準備大会講演資料）

とくに、人文科学は抽象性の高いものであり、一般生活における応用のききにくい面があった。しかし、その姿勢は現実的な成果を求める風潮の強い現代社会においては、かえって貴重である。理想主義的な理念がないところに、理想的な街づくりづくりはありえない。現実的な方法だけでは、出来上がるものに限界がある。現代の社会問題はまさにその結果としてある、のである。今までに行われてきた地域学が、二つの方法として別々に歩んできたと指摘したのは、まさにその意味での反省である。ここに、さまざまな、方法の異なる学問が寄り集まる意味がある。

われわれがめざすのは、学的な評価に耐えうる学問としての地域学であり、また、現実的な問題解決が可能な地域学である。南大阪地域の知の結集こそがそれを可能にする。若い柔軟な発想が、そこには求

められる。大学において、若い、しかも実践的な人材が集う「大学」という場において、まず地域学を指向するのは、それが未来を指向するものであるからにほかならない。

【補注】

堺・南大阪地域学の成果は、本シリーズにおいて蓄積が進められている。

16頁にあげた小股憲明『南大阪地域大学コンソーシアムの挑戦－産学官民地域連携の新たな展開－』以外にも、黒田研二『大阪の精神医療』、山中浩之『南大阪の文化基盤』、張麟声『中国語話者のための日本語教育研究入門』、村田右富美『南大阪の万葉学』、西田正宏『堺・再発見』があり、また、共著として『関西国際空港が拓く南大阪の可能性』、『大阪湾の自然と再生』、『地域医療論－大阪の医療をみつめて－』がある。

【補記】

再版に際して、補注と若干の訂正を行った。

OMUPブックレット　刊行の言葉

今日の社会は、映像メディアを主体とする多種多様な情報が氾濫する中で、人類が生存する地球全体の命運をも決しかねない多くの要因をはらんでいる状況にあると言えます。しかも、それは日常の生活と深いかかわりにおいて展開しつつあります。時々刻々と拡大・膨張する学術・科学技術の分野は微に入り、細を穿つ解析的手法の展開が進む一方で、総括的把握と大局的な視座を見失いがちです。また、多種多様な情報伝達の迅速化が進む反面、最近とみに「知的所有権」と称して、一時的であるにしても新知見の守秘を余儀なくされているのが、科学技術情報の現状と言えるのではないでしょうか。この傾向は自然科学に止まらず、人文科学、社会科学の分野にも及んでいる点が今日的問題であると考えられます。

本来、学術はあらゆる事象の中から、手法はいかようであっても、議論・考察を尽くし、展開していくのがそのあるべきスタイルです。教育・研究の現場にいる者が内輪で議論するだけでなく、さまざまな学問分野のさまざまなテーマについて、広く議論の場を提供することが、それぞれの主張を社会共通の場に提示し、真の情報交換を可能にすることに疑いの余地はありません。

活字文化の危機的状況が叫ばれる中で、シリーズ「OMUPブックレット」を刊行するに至ったのは、小冊子ながら映像文化では伝達し得ない情報の議論の場を、われわれの身近なところから創設しようとするものです。この小冊子が各種の講演、公開講座、グループ読書会のテキストとして、あるいは一般の講義副読本として活用していただけることを願う次第です。また、明確な主張を端的に伝達し、読者の皆様の理解と判断の一助になることを念ずるものです。

平成18年４月

OMUP設立五周年を記念して
大阪公立大学共同出版会（OMUP）

乾　善彦
（いぬい・よしひこ）

【筆者略歴】

大阪府立大学　人間社会学部　言語文化学科　教授

1956年、奈良県生まれ。1987年、大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。帝塚山学院大学講師、助教授を経て、1996年、大阪女子大学教授。2005年、府立３大学統合により現職。博士（文学）。

専攻は日本語の書記史および文字論。主な著書に、『漢字による日本語書記の史的研究』（2003、塙書房）、『『世話早学文』影印と翻刻』（2000、和泉書院）などがある。

OMUP

OMUPの由来
大阪公立大学共同出版会（略称OMUP）は新たな千年紀のスタートとともに大阪南部に位置する5公立大学、すなわち大阪市立大学、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学ならびに大阪府立看護大学医療技術短期大学部を構成する教授を中心に設立された学術出版会である。なお府立関係の大学は2005年4月に統合され、本出版会も大阪市立、大阪府立両大学から構成されることになった。

Osaka Municipal Universities Press (OMUP) was established in new millennium as an association for academic publications by professors of five municipal universities, namely Osaka City University, Osaka Prefecture University, Osaka Women's University, Osaka Prefectural College of Nursing and Osaka Prefectural College of Health Sciences that all located in southern part of Osaka. Above prefectural Universities united into OPU on April in 2005. Therefore OMUP is consisted of two Universities, OCU and OPU.

OMUPブックレット No.6
「堺・南大阪地域学」シリーズ1
堺学から堺・南大阪地域学へ
—地域学の方法と堺・南大阪地域学 —

2006年8月10日　初版第1刷発行
2008年3月31日　第二版第1刷発行

著　者　乾　善彦
発行者　三田　朝義
発行所　大阪公立大学共同出版会（OMUP）
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1－1
大阪府立大学内
TEL　072(251)6533
FAX　072(254)9539
印刷所　有限会社 扶桑印刷社

© 2008 by Yoshihiko Inui, Printed in Japan
ISBN978－4－901409－21－6

ISBN978-4-901409-21-6
C1337 ¥800E

定価：本体価格800円＋税